

●ロシア留学セミナー (東京/11 月 16 日)

私のロシア語勉強術



柴田友子 (ロシア語同時通訳者)

みなさんこんにちは。職業的な癖っていうか、身についたものは恐ろしいもので、今、主催者の方がお話になって私のことを紹介して下さっていると、なんとなく訳し始めてしまうんですね。頭の中で。最初に皆さんにご挨拶して、「Я хотел бы прежде всего поблагодарить всех кто пришел сегодня. У нас в гостях переводчик синхронист с русским языком госпожа Сибата которая любезно согласилась прийти и выступать перед нашей аудиторией и та та та та」となるんですけども、ただこれだけ言っただけでも、間違えるチャンスってものすごくたくさんありますよね。まず、**в гостях** って言ったけど、一人でも **в гостях** なのかな? って。今日の参加者は、ロシア語留学を考えてらっしゃる皆さんなので、ロシア語をある程度勉強していらっしゃる方々だと思いますが、ロシア語歴ってどれくらいですか? 1 年以下って人? (3 分の 1 ほど挙手) あ、結構いる! 1 年から 2 年の間? 2 年から 3 年、学生さん達かな? 3 年以上? (4~5 人挙手) 分かりました。そうしたら私は、何十年もやってるんだから、当然みなさんよりもロシア語はよく知っているはずなだけで、それでも、やっぱりまだいろいろなところで間違えます。それでまず、1 年以下という人は今私がロシア語で言ったことがよく分からないという人もいると思うけど、まず「今日はお客様にこれこれの方がいらしてます」と言う時に **у нас в гостях** っていうんだけど、それは一人しかいない時に複数で言っているのかなって疑問がありますよね。これは複数で言っているだけ。それから、**я благодарен** 先ほど挨拶されたのは男性だから男性形で言わないといけないということがまずあって。それから、**за то что пришли** っていう時に、電車で来た人もいるかもしれないのに **пришли** っていうのかな? という疑問がありますよね。まだそういうこと習っていない人もいますか? **ехать/идти** そういうのは知ってますよね、そういう使い分け。それから **я хотел бы поблагодарить всех, кто пришел** っていう時に、関係代名詞でつないだ次は、**кто** なんだから 3 人称単数になるんだよねってということもありますね。このように、ロシア語ってものすごく単純な事を言おうと思ってもいっぱい間違えるチャンスのあるとっても理不尽な言葉です。英語だったら、**I go to school** って言え



ばいい所を、**я иду** なのかな? もしかして **хожу** かなとか。**в школу** なのかな? **на** じゃないかな? (!!!) とかこういういろいろなことを知らないと、初期の段階からもっとも簡単なことを単純にしゃべるっていうことが出来ない言葉なんだよねって気がします。で、その困難さというのは永遠に続いていて、私はもう何十年もロシア語をやっているわけだけれども、口を開くと間違えるという状況です。

同時通訳という仕事

今日こうして集まっていたいただいた皆さん。ロシア語を使って仕事をするっていうのは、どういうチャンスがあるのかなって、ロシア語を使って実際に仕事してる人ってどんな人で何をやってるのかなっていうことに、非常に興味がおありだと思います。今日は、もちろん自分の通訳としての仕事についてお話するとともに、やっぱり留学に興味がある皆さんだから、留学についても触れたいと思います。

まず私は、今、ご紹介いただいたように、ロシア語の通訳をしています。それでさっきの話に戻るんだけど、またもう一つ間違えるチャンスとしては、ロシア語の通訳ってどう言うんだろうなって、思いませんか? まさか、**русский переводчик** っていうじゃないよね。でそうすると **переводчик с русским языком** なのか、あるいは **с японского на русский** なのかな、って。間違える落とし穴っていうのはいくつもあるんですね。女なのに **переводчик** でいいのかなとかね。なんでこういう話か

ら始めたのかというと、私自身ネイティブじゃないわけです。ネイティブじゃないんだけど、いろいろな成り行きで仕事として通訳を選んできました。そして何十年も通訳をやってきて、今やっている仕事は主に会議通訳です。会議通訳と朝の BS 放送のニュースの通訳をチームの中に入ってやっています。1年 365 日あるんだけど、その中の稼働日数が私の場合は大体 150 日。150 日というのはそう少なくはないんですね。実は通訳の場合は準備の時間が必要ですので、200 日になったら働き過ぎです。150 日というのはかなり仕事に恵まれてはいるし、少なくは無いと思います。その 150 日のうちで、NHK の BS をやっているのが大体月 4 回ですので、48 日。それから、会議通訳。同時通訳の会議をやっているのが 20~30 日。その残りの部分が表敬の通訳をやったり、セミナーの通訳をやったり、いろいろですが、逐次の通訳をしています。

失敗談は言えません！でもたくさんあります。

いろいろ失敗談もして欲しいと主催者の方に言われていますが、だけれども実は現役の通訳者がね、一番面白い失敗談をいろいろなところで話したら、もうおそらくその人には次の仕事は来ないでしょう。大体クライアントというのは、無事に済んだと思っている仕事で、実は通訳がこんな失敗をしてたなんて知ったら愕然としますし、そうじゃなくてもあの時はこうこうで、私があの方の通訳をした時はこうで、こういうことがあってという事をあちこちで話すような人はやっぱりクライアントとしては使いたくない。ですから、もちろん失敗談もたくさんあって、そういうものは溜めてあるんですけど、それを皆さんにお話しする時っていうのは、きっと私がもう引退しようかなって、メモワールを書いてもいかなって時になると思います。でも、通訳の世界というのは綱渡りみたいなものでね、罪のない話もいっぱいあります。例えば、まあ自分じゃないから言えるんだけど、言い間違えも結構ありますね。橋本元首相がシルクロード外交という事をおっしゃった時に、どこの会議に行ってもシルクロード、シルクロードって出てくる時期がありました。その時に私と組んでいたパートナーが仕事終わってからお客さんに、「あんたね、ずっとシルクロード、シルクロードって言ってたよ」って言われて愕然とした事がありました。まあそのへんは罪のない間違いですけど。またこれも自分じゃないから言えるんだけどね、人の名前を間違えて通訳にとっても恐ろしいことです。中央アジアの国々は皆さんもご存知だと思いますけれども、5つありますよね。キルギスのアカーエフ大統領が来日されて、歓迎レセプションのときに

同僚が思わず、уважаемый президент республики Киргизстан господин Алиев って言っちゃったの。今笑いが来ないっていうのはもしかして知りませんか？アラーエフってどこの大統領か知っていますか？アカーエフさんというのは、キルギス共和国の大統領。アラーエフさんというのは、今息子さんに代わろうとしていますが、アゼルバイジャンの大統領。一字違いなんですけど、それはものすごく恐ろしい間違いです。聞く本人は、「まあいいよ。一字違いだから」と言ってくれたんですけども。そういう間違いは、実は私もいっぱいあって、3月に環境問題に関する大きな国際会議があったんですけども、中央アジアの国々からトルクメニスタンを除く 4カ国の環境大臣が主催者側に挨拶をするという表敬訪問がありました。その際に、アラル海の環境問題というのは中央アジアではものすごく深刻な問題なので、主催者側である国際機関が、それに関して大変配慮して下さっている事に感謝するというお話がありました。その時に、この方もいらして下さったし、この方もこの問題には目を向けてくださっていて、という感じで名前がいっぱい出たんですね。それで私は、国連のアナン事務総長のことを元事務総長と言ってしまったんです。なんでそういうことになったかと言うと、たくさんのお名前が出てきて、オルフェンソン世銀総裁だのキャロル・ベラミーユニセフ事務局長だの、ユネスコの松浦事務局長など、なんか凄くスラスラ言えたので、あれ調子良いじゃんと思ってたら、突然 экс-президент господин Анан って聞こえたような気がしたんですね。今となってはもう分からないんですけども、突然頭が真っ白になって、今現在の事務総長なのか、もしかして元なのかな？って分からなくなっちゃったんですね。それは、アメリカがイラク攻撃を始めた 3月のちょうどその日に重なった日で、アナン事務総長が大活躍なさっていたその中で私は罪深くも元事務総長と言ってしまって、もちろんその場の雰囲気は凍りつくのを感じました。でもどうしようもないですからね、急いで言い直してそのままダダッと行くよりしょうがないという、大変辛い恐ろしい思いをしたことがあります。

同時通訳はいつも極限状態

で、こういう失敗は、もっともっとたくさんあって、本当は誰にも話せない深刻な失敗談というのは、誰でも深い穴を掘って埋めてあるのがきっといっぱいあるんです。とっても大事な記者会見で最初の質問が聞き取れなかったとかね。まあ皆さんもこれから味わうかもしれないそういう恐ろしい目にこれまでたくさん会っ



てきました。なにしろ、私がやっているのは同時通訳という、ロシア語を使う仕事の中でもとても特殊な世界なんです。今からロシア語をやっているという皆さんは、必ずしも通訳を目指す人ばかりじゃないと思うし、ましてや同時通訳という本当に特殊な世界に入っていく人は、本当に何人いるのでしょうか。放送通訳っていうのもまたすごく特殊な小さな世界です。例えば放送通訳の場では、視聴者に分かるということが一番大事な優先事項になります。だから通訳という立場から言うと、ちょっと誠実でない態度になるのかもしれないけど、よく分からなかったことは、むしろ言わないというような態度が求められることがあります。ひたすら正しく訳せば良いのではなくて、皆に分かる言葉で、日本語でちゃんと分かる言葉で伝えていくことが求められる世界です。その中で、通訳といっても、様々な通訳の種類があって、先ほど主催者の方がテレビで通訳の名前がテロップで流れるよっておっしゃったんですけど、「同時通訳」というテロップが出るときと、「通訳」とテロップが出る時とは明らかに違うんですね。「同時通訳」のテロップが出る時は、前もって一度も聞いていません。まさに私達が言うところの「生同通」と言うんですけれども、一番恐ろしい「通訳」なんですね。また、あたかも同時通訳のように聞こえても通訳というテロップが出ている時は、少なくとも事前に一回は聞いています。これはもうものすごく大きな違いで、そういうことも知って見て頂けるともっと面白いかなと思います。



で、「生同通」というのはものすごく極限的な状況でやっているから、うまく出来ても出来なくてもそれをやってしまった時には気分的にもものすごくハイになっています。なんで私がそういう世界に足を踏み入れてしまったかという、これは多分 1985 年のゴルバチョフのペレストロイカ時代に一時的に報道通訳の需要がものすごく増大した時があったからです。で、日本中がソビエトがどう変わっていくかという事に興味があったし、その時に放送も同時に流したいという需要が急増して、私は多分その時まで同通をそんなに出来るってレベルではないけれどもやりたいという気持ちは持っていたので、「真夜中だからやってよ」とか、そういう言葉でだまされて、ブースに放り込まれるということが何回かありまして、同時通訳の世界に入ってしまったんですね。ですからそれ以降の私の通訳歴というのは、いつもいつも背伸びをしながら力が及ばない仕事が降ってくるのを必死でさばいているという、そういう状況が続けて、気が付いたら何十年もやっていた、ということかも知れません。

テレビの同通というのは非常に短い時間を全力で頑

張れば良いということが多いんですね。それもロシア語を自分のネイティブランゲージである日本語に直すものです。ロシア語をやっている人というのは、ある時期まで、どこが先に伸びていくかという事は人によってすごく違うんですね。日本でロシア語を外国語として学んでいる人は、ロシア語が飛躍的に出来るというか、ロシア語が非の打ち所がないようにできるということはあまりありえないので、大体日本語の方が先にうまくなっていくんですけれども、私の場合はそれが極端だったためにもものすごく苦労して来ました。

原稿出さないスピーカーは人でなし！ だけど出さない気持ちもよくわかる

ゴルバチョフさんの話に戻すと、ゴルバチョフさんの登場でロシアとロシア語への関心が急激に高まる中で、私たちは、彼の話す言葉の特徴とか話の内容にずっと興味をもちながら私達の世代の通訳は、ゴルバチョフだけでもないけれども、そうやって通訳というものをやってきたと思うんです。因みに、一番直近でやった仕事が、ゴルバチョフさんの通訳だったんですね。最近、彼が日本に来て、大学の名誉学位をもらって、記念講演を行った、そのスピーチの通訳でした。その時に原稿が出なかったんですね。1 時間のスピーチ。スピーチと質疑応答で大体 1 時間半くらいでした。事前に何も出なかったんです。私は今日みなさんの前でお話させて頂く機会を得て、原稿を出さない人の気持ちというのがものすごくよく分かったんですけど、原稿を出すっていうことは、もう話す前から自分がある枠に捕らわれるという気がしてね、どの人もギリギリまで原稿を書きたくないと思うんですね。それで私も原稿にしないでメモにして持って来てる。だけれども、通訳者のあいだでは原稿を出さないスピーカーというのは、まるで人でなしのように、悪しざまに言われます。何でって、通訳がしゃべれなければあなたがどんなにすばらしいスピーチをしたって人には伝わらないじゃないかって。話す内容を先に言っておいてくれれば、美しいちゃんとした言葉を選んで通訳できるのに、多くの方はそれをしてくれない。どんなにエージェントが頑張ってくれても、私達自身が直前に走って行って、メモがあるんじゃないですか追いついても、「ありません」とか言って、その場になるといきなりメモを出してね、読んだりする方が往々にしていらっしゃいます。それであんまりうるさく言うと、前の別の会議でやった原稿をくれたりして、私達が必死になってその翻訳原稿を作っていくと別の原稿を読まれたりして…。そういう辛い目にいっぱい会っています。

そうすると、国際会議なんだから原稿は事前に出すべ

きだというのが、通訳者としての考え方ですし、そのことをお客さんにも訴えて教育していかなくちゃいけないという人もいます。通訳者の間ではそういうことが当然の常識として語られてきてるんだけど、私がこうして実際にお話する立場になると、何を話そうかなってことはギリギリ最後まで考えてるし、お客さんの顔をみてまた考え直したりするし、いくつかのバリエーションの中からどれかを話したいと思うし…。それで、必ず原稿を出してくれって言うのはもしかしたら無理なのかなって、この頃思います。



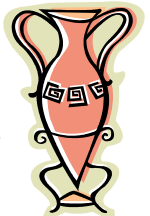
どんな無理なことでもやってるうちに無理でなくなる

私達のほうも原稿が出ないという状況に、何度も辛い目にあって修羅場をくぐってくると、だんだん対応できるようにはなっているという不思議な現象があります。昔、ソビエト時代には、原稿を読むというのが当然のことでした。それが、ロシアの時代になって、言論の自由ということで、一時的にどの人も自分のユニークな考えを語るということが凄く立派なことだと思われていた時代があって、だから先に原稿出すなんてとんでもない、自由に話すっていう時代もありました。でも例えば、どんなに無理だと思うことでも、やっているうちに無理じゃなくなってくるっていう、とても不思議なんですけれども、そういうことがあります。私達自身も、例えば日本の自動車業界が、環境問題や為替レートの変動の影響で、理不尽とも思えるような厳しい状態に置かれていながら、死にもの狂いで技術革新とか省エネに取組んで、逆に世界市場で十分やっていく力を付けていく、新しい技術で大気を汚さないエンジンや車を開発していくっていう、そういう方向があるのと同じように、通訳者もだんだん成長して、原稿がないならばそれで、それに対応しなければならぬという風になってきて、おそらくそういう状況にも挑戦していこうという通訳者が何人か、何十人とは言いませんが出てきているとい

うことは確かだと思います。

それで、事前に原稿が出ない時はどうするか。例えばゴルバチョフさんですけども、どういうことを彼が話すのかということ自分で調べて、その人ならそう言うであろうということを知っていて、そして、こういう言葉は日本語のこの言葉に置き換えるということを機械的に練習して、全部頭にいれておいて、彼が話し始めたらぴったりついて行って遅れないように、自分を空っぽにしてぴったりついて行くっていう対応が要求されることとなります。でこの時、当然の事ながら、これ日本語に出すので幸いなんですけれども、格変化がどうかであるとか、もう一ランク上のきれいな言葉で話したいとかそういうことは一切考えずに、ひたすら話の骨格を見失わないように必死になってついていきます。

放送通訳でもそうですけど、「生同通」というのは本当に極限状態でやりますから、終わったら、出来る限り主催者とか関係者の方々と話をしないでさっと引き上げます。そういう仕事が終わった時は、何故か本当にあれもこれも出来なかったという絶望的な状況になっていますので、下手にお話すると、「あー、私、あれが出来なくて」って、次々と言ってしまいそうになります。しかし、これは皆さんにも参考になると思うんですが、自分のマイナス面をお客さんに言うてはいけません。出来なかったということを、必要以上にお客さんやクライアントに言うことはやはりプロとして避けなければならない。それと同時に、その終わった瞬間は本当に沈み込んでいますけれども、後になってビデオを見てみれば、まあ、そう良くはないけれども、まあいいんじゃないかって場合も多いんです。だけれども仕事を終わった直後の絶望感っていうのは本当に大きくて、家に帰ったらやけ酒飲みながら泣き伏してしまうとかね、そのような状況で仕事をしています。でもそういうものばかりではなくて、あらかじめシナリオの出る会議とか、スピーカーの原稿が先に全部出てくるような仕事もたくさんあって、その時はよく準備して、プロの司会者の人がスラスラと綺麗に述べて、そしてスピーカーの方達もさーっと述べて、メッセージなんかも送られてきてなんていうのは、あらかじめ用意した翻訳原稿を、さーっと綺麗に流して読むようにこちらでも努力しています。



つづく

次回タイトル「留学はゼロサムゲーム」

(一部ご紹介) 留学するのかもしれないのかということ考えた時に、留学っていうのはもしかしたら、一方がプラスになったら他方がマイナスになる「ゼロサムゲーム」にたとえられるのではないかと思います。・・・